



シチュエーション・コメディにおけるギャグの生成 と機能――I Love Lucyのテキスト分析――

高木, ゆかり

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-03-25

(Date of Publication)

2018-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6551号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006551>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式3)

論文要旨

氏名 高木 ゆかり

専攻 文化相關専攻

指導教員氏名 西谷 拓哉

論文題目 シチュエーション・コメディにおけるギャグの生成と機能

——*I Love Lucy* のテキスト分析——

論文要旨

アメリカのテレビドラマ *I Love Lucy* (CBS 1951-1957)は、毎回同じ登場人物で物語が展開していくことや、夫婦、家族、職場など、ある特定の場所や環境での人々の生活を面白おかしく描くことを特徴とするシチュエーション・コメディの古典的作品である。本論は、当ジャンル、あるいは当作品に関してこれまで成されてきた多くの社会的・文化的文脈に結びついた研究とは一線を画し、この作品のシチュエーション・コメディとしての内在的な本質を読み解くため、その形式に即した微視的な分析を試みるものである。具体的な方法としては、『アイ・ラブ・ルーシー』全体の基調を成すギャグが作品構造と密接にかかわる様々な機能を有していることを明らかにした。

第1章『マイ・フェイバリット・ハズバンド』から『アイ・ラブ・ルーシー』へでは、具体的な分析に入る前段階として、『アイ・ラブ・ルーシー』とその先行作品であるラジオ番組のギャグを比較し、ギャグが、メディアの移り変わりに応じて言語・聴覚的なものから視覚的なものへと発展しているということを明らかにした。

第2章の「変装／変換(トランスフォーメーション)としてのギャグ」では、「変装ギャグ」に注目し、主人公ルーシーの置かれた状況や物語構成と関連付けて考察した。ルーシーの状況は「大状況」(ルーシーの人物像と彼女が置かれている基本的な状況の設定)と「小状況」(各エピソードのプロットが始まる際、彼女がどのような立場に立っているかという初期設定)に二分できるが、これらの状況によって、変装ギャグはその種類や特徴が決定づけられる。さらには、グレアムの理論を援用し、状況によって「生み出された」ギャグがストーリーの進行につれて、逆にルーシーの小状況を変える機能を有していくことを明らかにし、このようなギャグと状況の「対等な」相互関係こそ『アイ・ラブ・ルーシー』の変装ギャグの本質であると結論付けた。

第3章「手錠で繋がれた夫婦(カップル)」では、“The Handcuffs”で使用されている「手錠ギャグ」を、連続性・連結性の観点から分析した。本エピソードでは、「夫のリッキーと一緒にいたい」というルーシーの願望が手錠を用いて表されているが、エピソード内のルーシーの願望という枠組みを超え、番組全体を通して存在する「芸能界に入りたい」という願望に照らして再度ギャグを見ることにより、手錠の「連続ギャグ」は単純な反復ではなく、ルーシーを家庭の外へと連れ出す方向性を段階的に描く「連結ギャグ」の要素も兼ね備えていることがわかった。この連結ギャグを通してエピソードの結末を見直せば、「手錠が外れる」というルーシーを束縛から解放へと導くはずの

行為が、実は彼女を家庭へと連れ戻すという最大の「オチ」になっていることがわかり、連続・連結ギャグの分析が作品解釈の重要な一手法になりうることも示した。

第4章の「Lucy on the Road」では、物語形式の観点からギャグの機能について論究を試みた。テレビドラマにはシリーズとシリアルな二種類の形式があるが、伝統的なシチュエーション・コメディ、とりわけ『アイ・ラブ・ルーシー』はシリーズに属し、①登場人物・状況が一定、②一話完結、③円環的物語構造を有した形が標準形となっていることを提示した。しかし、『アイ・ラブ・ルーシー』には、標準形から逸脱したエピソード群が存在する。本章では、そこで使われている乗り物ギャグを取り上げ、ルーシーと乗り物のベクトルが相反することでギャグが生じていることを確認し、乗り物がルーシーを大状況へと戻す力を象徴的に表していると解釈した。乗り物ギャグは、ルーシーが家に戻る最終段階において、ジャンルの大きな強制力と「大状況」への円環的な回帰をダイナミックに視覚化したものである。大掛かりな乗り物ギャグは登場人物とジャンルの規範との力関係＝力学を際立たせる機能も併せ持っていたのである。

第5章「ギャグの複層性とキャラクターの形成」では、第1話“The Girls Want to Go to a Nightclub”の言語的ギャグを取り上げ、一つのエピソードの中に、これまで見てきたギャグの機能が複層的に存在することを確認した。その結果、作品内で使用されるリトル・ボーイ・ブルーとピーター・コットンテイルという児童文学に登場するキャラクターを想起させるギャグには、これまでの章で見てきた様々なギャグの機能が、最初のエピソードの中に同時に存在することが確認できた。さらにこの第1話のギャグには、7年間という放送期間を通じて培われていくルーシーの幼児的なキャラクター像を形成する土台としての機能があることが発見できた。

本博士論文では、主に二つの点で成果を上げたと考える。まず、コメディの側面から見た新しいテキスト論を提示したという点である。これまでの先行研究は作品構造や表現形式に密着した研究があったとしても、大まかにストーリーやシーン構成を論じているだけで、テキストを緻密に読み込んでいるとは言い難かった。また、これらの研究はコメディに欠かせない要素であるギャグの分析を見逃していた。そこで本論では、シチュエーション・コメディの本質を明らかにするために、詳細なテキスト分析という手法を駆使し、ドラマとしての側面に、コメディとしての側面も合わせた総合的な作品分析を行った。その結果、『アイ・ラブ・ルーシー』をその内実に即して、新しい観点から解釈することができたのである。

二点目は従来のギャグの定義を更新したということである。ギャグはストーリーの流れに垂直的に割り込み、その場その場で笑いを取るために用いられる一過性のものと捉えられる傾向にあった。しかし、『アイ・ラブ・ルーシー』では、ギャグは作品構造の中に深く、有機的に組み込まれていることを実証し、ギャグの機能に関する理解を更新することができた。

『アイ・ラブ・ルーシー』はあらゆるシチュエーション・コメディの原型といわれている。それが揺るがない評価だとすれば、本論で論じてきたギャグの機能の点においても『アイ・ラブ・ルーシー』は後続作品の規範となっていた可能性も考えられる。しかし、これはまだ仮説にすぎない。なぜなら、原型とはいえ、それは社会的・文化的な側面からなされた評価であるからだ。ギャグの側面からみてもこの作品が原型だったと見極めるためには、社会的・文化的な側面からこの作品を原型だと見定めたのと同じ手続きを踏まえる必要があるだろう。つまり、本論で用いたギャグ分析の手法を60年代、70年代、さらには現代にまで至る代表的な作品に適用し、各作品の構造を分析していく必要がある。そうすれば、シチュエーション・コメディというジャンルの定義そのものをギャグの観点から拡充し、このジャンルの芸術性や大衆性の核心に迫ることも可能になってくるだろう。その時初めて、本博士論文で行ったことは、単に一つの作品を取り上げたギャグ論、作品論という枠にとどまらず、シチュエーション・コメディというジャンル全体の特質と発展形態の考察に一石を投じるような新たな手法を提示し得たと評価することができよう。そういった意味で、本研究の持つ意義は決して小さくないと考える。

論文審査の結果の要旨

氏 名	高木 ゆかり		
論文題目	シチュエーション・コメディにおけるギャグの生成と機能 —— <i>I Love Lucy</i> のテキスト分析——		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委員長	教授	野谷 啓二
	委 員	准教授	板倉 史明
	委 員	教授	西谷 拓哉
	委 員	大阪大学大学院言語文化研究科教授	貴志 雅之
	委 員		印
要 旨			
本博士論文は、テレビのシチュエーション・コメディにおけるギャグが、ストーリーの流れに垂直的に割り込んで単発的に笑いを生じさせる以外にも、様々な物語論的機能を有することを論じたものである。高木氏はこのジャンルの古典的作品である<i>I Love Lucy</i>を詳細に分析し、ギャグが作品構造に深く組み込まれ、プロットの展開や人物像の形成に密接に関係していることを検証している。氏の研究は、従来の文化史、社会史との関連からなされたシチュエーション・コメディ研究及び<i>I Love Lucy</i>研究の趨勢に異を唱えるとともに、物語論に基づく先行研究をさらに精密化し、ギャグ分析を通じてシチュエーション・コメディの本質を析出している点、また、我が国においておそらく初めての本格的なシチュエーション・コメディ研究であるという点で極めて大きな学術的意義を有している。 各章の内容は次の通りである。第1章『「マイ・フェイバリット・ハズバンド」から『アイ・ラブ・ルーシーへ』で、<i>I Love Lucy</i>とその基となった先行のラジオ番組の比較を通して、ギャグが聴覚から視覚に訴えるものへと発展していった経緯がメディア史に即して論じられた後、第2章以降は<i>I Love Lucy</i>における視覚的ギャグの機能が論じられる。第2章「変装／変換としてのギャグ」では、ルーシーが変装するギャグと彼女が置かれた状況と			

の関係が考察され、状況に応じて変装の自由度が異なる4種類のギャグが生成される過程が分析される。次いでグレマスの「変換行為(*F transformation*)」モデルを援用し、ルーシーが変装によって姿形だけでなく、自身の状況をも変えていること、ギャグが状況によって受動的に形成されるだけでなく、自らを契機として状況を逆転させる能動的機能を有していることが明らかにされる。

第3章「手錠で繋がれた夫婦」は、エピソード内のギャグの連続性・連結性に焦点を当て、笑いが重層的に拡大する過程を詳細に分析している。また、家庭内に留め置かれるというルーシーの「大状況」(番組全体の基本的な設定)に照らして連続ギャグを見ることにより、ギャグの小道具が持つ象徴的な意味を明らかにしている。シチュエーション・コメディのギャグの連結構造と番組全体のテーマとの有機的な結合を解明し、ギャグ分析が作品解釈の重要な手法となりうることを例証している点が本章の意義である。

第4章「*Lucy on the Road*」は、ドラマの形式それ自体とギャグの関係に着目する。まず、テレビドラマにおけるシリーズとシリアルという二種類の形式の相違を踏まえ、シチュエーション・コメディとりわけ*I Love Lucy*がシリーズに属し、一話ごとに主人公が大状況に立ち戻るといった円環的構造を持つことが確認される。しかし、本章は、それとは異なる、シリアルの直線的構造を持つエピソード群に着目し、そこで用いられている乗り物ギャグを分析し、乗り物がルーシーを大状況へ戻す力を象徴的に表していること、ルーシーの乗り物に対する抵抗はジャンルの強制力に反抗しようとする身振りであることを論証する。本章は、ギャグが登場人物とジャンルの規範との間の力学を際立たせる機能を併せ持っていることを解明した、秀逸なジャンル論となっている。

第5章「ギャグの複層性とキャラクターの形成」では、*I Love Lucy*の第1話が分析される。シチュエーション・コメディの物語構造上、*I Love Lucy*が常に円環的に立ち返る場所は第1話だからである。分析の結果、これまでの章で論じられてきたギャグの機能が第1話の中に既にして複層的に凝縮されていることが明らかにされる。同時に、第1話のギャグが番組全体を通して作られていくルーシーの幼児的なキャラクターを形成する土台としての機能も果たしていることが実証される。本博士論文は、ギャグを捉える視点をギャグ単体から複数へ、ストーリーの枠内からドラマの枠組みそのものへと拡大する方向性をとりつつ、それを最後に第1話に収斂させることによってジャンルの円環的構造自体を再現しており、ここには論述方法と構成についての高い意識がうかがわれる。

なお、本博士論文の基となった主な学会報告、学会掲載論文は次の通りである。「*I Love Lucy*にみる変装ギャグ」日本映像学会第36回全国大会、日本大学芸術学部、2010年5月30日(第2章)、「*I Love Lucy*における「変換行為」としてのギャグ—グレマスの「欲望の関係」からの考察—」アメリカ学会第45回年次大会、東京大学、2011年6月4日(第2章)、「*I Love Lucy*における言語的ギャグの機能について—“The Girls Want to Go to a Nightclub”に即して—」テキスト研究学会『テキスト研究』第11号(2014年2月、査読あり)(第5章)、「手錠で繋がれた夫婦—*I Love Lucy*におけるギャグの連続性と連結性—」同第12号(2015年2月、査読あり)(第3章)。

以上のように、本博士論文は、*I Love Lucy*におけるギャグの諸機能を見出すことにより、従来のギャグの定義を更新するとともに、先行研究では十分に明らかにされてこなかった*I Love Lucy*のコメディ作品としての緻密な構造を析出し、一作品研究という領域に留まることなく、ギャグとシチュエーション・コメディの物語構造との有機的な関係を解明しているという点、さらに、分析対象をギャグに特化することで、シチュエーション・コメディの「笑い」と文化的・社会的文脈を接続する新たな回路を示唆している点で、アメリカ大衆文化研究に関して独創的かつ大きな学術的貢献を果たしている。よって、審査委員会は、学位申請者高木ゆかり氏は博士(学術)の学位を得る資格を有すると認める。